

連歌のように交互に紡ぐ
不思議な小さな物語



往復嘘話

はちとミキちゃん

と言う、夢をみました。 （はち）

「たまにやりますよ」
と、ミキちゃんはけるっと言う。
旅行中の電気ドロボウのことだ。

ドキドキしながら
やったこともないのに
「私も、たまにやるやる」と受けた。

どうやって充電器を繋ぐのか問うたら、
ミキちゃんは「実践しよう」と
誰かの家に上がり込んだ。

もう真夜中、なかの人は寝静まってるはず。

やはり家の中は静まり返っていた。
このまま寝ようかな、眠いし。

ふとんに横になりながらそんなことを思っていると、
ひとの気配。

宇宙盗賊が潜んでいる。

「見つかったら連れ去られる」
と、ミキちゃんと無言でアイコンタクトし合う。
このまま布団に紛れてやり過ごせるか？
「宇宙へ出てしまったら二度と帰ってこれないです」
ミキちゃんが囁く。

ドタドタと歩きまわる盗賊と目が合わないように
ジッと布団の中から動きを見守っていたが、
「スッ」と気配がして突然雰囲気が変わった。

あっ。家ごと宇宙へ出るようだ。

もう帰れないことを一瞬にして悟る。
外には暗黒の中の星が見えてきた。

返話。(ミキ)

ごっそり家ごと宇宙へ飛び出してしまうと、
「宇宙だよ、宇宙来ちゃったよ！」と小さい声で叫びながら
はちさんは私の腕を揺さぶった。
でも、興奮しているだけで多分あまり怖がってはいないと思う。

私は正直ちょっぴり怖かった。
なので、腕を捕まれていることに少し安心しながら
「宇宙ですね、宇宙来ちゃいましたね」と
できるだけ冷静な声を作っておたえておく。

隠れていたお布団の向こうは日焼けした畳と、
丸いちゃぶ台、レースのカーテン。
窓の外は、真っ暗闇とキラキラ無数に瞬く星たちで溢れかえっている。

眩しい。

宇宙はこんなにも広くて、果てしない。
果てのないものは怖くて、
こんなものから逃れる術を、私は知らない。
ゾクゾクしてきて目を反らすと、
壁のコンセントに気がついた。

「...とりあえず、電気、貰っておきましょうか」
はちさんも「そうだね、初志貫徹だね」と頷く。
カバンの中の充電コードを探ると、
横のポケットにチョコレートとスケッチブックも入っている。
あ、と思って振り返った。
片手に充電コード、片手にペンとハサミを持ったはちさんも、
ちょうど、こちらを振り返ったところだった。

目が合って二人、にんまり笑った。

材料は揃ったが、形について少々揉めた。

はちさんはやっぱり猫にしようと言うし、
私は折角ならパンダが好きだ。

ああだこうだと議論しつつ、
ここは脱出を優先して無難な鳥に落ち着いた。
はちさんがスケッチブックにすらすらと描いた下書きを、
私が適当にアレンジしながらハサミで切りぬく。

白い、鳩っぽい、白鳥てきな、カササギとも言える、
アヒルのような鳥ができた。
なかなか愛嬌のある顔をしている。

鳥はチョコレートと引き換えに快く、
その背に私たちを乗せてくれた。

「電気ドロボウって楽しいね」
ちゃっかり充電しておいたスマホで
旦那さんにLINEをしながら、はちさんが笑う。
「そうですね」
私もスマホで起動させたナビを鳥に見せながら、笑った。

温かな鳥の背に揺られて、帰る旅路。
もう何も怖くない。
私たちの地球は遠いが、私たちの鳥も充分速い。

ふわりと翻る、
レースのカーテンもあっという間に遥か彼方、
白い鳥は颯爽と宙を飛んだ。